普廣院殿富士御覽
向道記　乾孝法師
侍奉

普廣院殿御百ヶ日法師供奉道記

九月ニ日下向之者法師供奉道記

七日道風おもひやるもいとあはれなり

ながめ涙ぞ川のせ

にしてはやせ川のせをこえ

なれば往来さえなくなりぬ

ふかく川の氏く

ゆきつるかさしなるんすくしけまいい

けくもやうにはうるもいうをそのこおぼゆる

清代ようにはわるなく実ものしいはんもいか

けるもまたいとあれはくいはくいはくいはく

ぬ月十日除日もほとふれにけれ礼侍る

にはつて始の四日来津つき時間を

ゑて物さつもの清さもはあはれ

空の雲ものきもみもはれはなりにし

かもくをかくおぼゆる物

あまつみ清代のひかりを今のいにて

はるはしるはまくはるる雨武

逢坂を越ゆるとて関の明神もはるる

まく

あすみ清水のいわを今日は拝
むとて出まして関の明神へ詣
逢坂を越えて関の明神へ詣
ます
元の代りあるいやうなき逢坂へ
さしもせきもなき神のしるし
思へば雲居をわけこゝに山のみて物の不
思の根はかたいやらまく
おもふ人の事へ遠ふ山の花
ちらくみてさる山のこゝのはさ
州津のやうして

近江海やあさなぎに出る船のして
ちさく雲迄小伊せとるき
やあ川のはるはるそはいとをかん
ちそうこへいしいはる
瀬の川の底なるやあ川の
なしのく石のいわを小船
多の泊武佐の宿とる次日東
かく山のあとを小船
月のうち船まちかく長い
やうの若野をこの先の
四十九院の宿
四十餘里あるものの宿名
やまとさう紙を伊せ張
大山とゝかるはるといふ川はくるとの
ど長分まもはるる谷人のあく里の
ゆくて山川の人地をみて
ふるとて瀬しはつまく
いとをいはる谷をの社伊河
ゝとはいはの水をはる
を野宿して
はるとわかゆく袖を露

ゑとといはるの水はしる音
を聞て宿して
明るとわかれゆく袖は露ぬれて
残る月をば山の端の月
たちわかれ峰を分るしら雲の
そらにぞ人の
なごりをしくも山道にいりぬれば
そもそも遠くやうやうそこに侍る
大く流せるもの山ぶしの
袖をわかつるの山ぶしの
あるべき所を過ぬれば
戸をとぢて絶せるとぢくかりて
こゝのことはるる彼のちぎりぞ
さる年のやうにて成く
世をこめて新をこそ
なりへるすみのえをなりん
なるべ伯耆国
美濃山やまに二ぬ陰ありて
しるさるる千世の姫
十二月末をこうくあむ川と中不思議
去傳遠させ所の川の岩波
ちらぬとこはる言のさわけ
吾野の原しやうん寺の言遍
鹿ぬ海あとのうらの言
そらるるもしらぬつとを
赤坂ぬ来るく
なるる遠姫のこと
神ぬはへくいうく
ぞ
ぞ
いかるる
和はえくも袖ぬ
うりの山野ぬ
いりくて
わいる

[illegible]

[illegible]

秋きよ田面のいる蓑かわそうく
霧のあさけのわらもほのか
くあせ川まくらとて

なされい雪をとくく川波の
くのせ乗うく舟やいかの女
なの橋をきこはいかをはけくとみる
いさしかのも

かをるあれとのあのけはなる春へく
まるもうかしかるをまわり

[illegible]

寒しもおむをとの所や雨をとそ
をいり船人も袖やさしけさ

須のまる川に真をかる法のあやまをを
河の面をひ行くて海つるかのかをて
舟橋はるはいまあの人徒馬ひもも
ふし或ふ木とのかをちはしく庭のな
むさおはるかるも舟をかいてかをわ
うくをるるいはは橋母なとえを待る
一ふ吹山殿りりをは対市池ふ毎
ふるも厳人ををくく宮也えわいふ
まるをかわしをくをえを夢のうは異
出されはわをは外はいかあもえ夜
はれををるん

島はをわいるうをすのまるみれい
しるる縄りをは引也
なをいるもをも遠ふまわる
ふはおのはのうふををのは

尾張の國なるいるく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おなじ所の海
かいけとをとゝ狭田の宮のまへ人丸海にて
はをとゝのゆるとゝ詠りし昔日本
武尊東夷征伐の帰りのさいなをも
山さのぼし時に伊勢大神宮に
して大和姫のおゝせに命ぜられ
はをとりて霊剣もじ神殿をとゝまり
せおくとゝすとゝ聞とゝ神話
護國寺ちらしも花をしくおぼえ
花もまをれくゝあつるの宮の庭
をしりと風すさ猛はゆきて

遊業ぬ鴻をすく

君の為老をあくまわをとゝ以を
をとゝやをとゝ海光をわせん

鳴海うゝて

をとゝをとゝ海をくなるみゝ
をとゝをとゝかいの林のもを
夜さしぬとゝ物をとゝ思をとゝく
うゝ

うゝ所すはゝいをとゝ物をとゝ
をとゝ物の猛をとゝ

参川國八橋にて杜かきつばたを
詠し歌

杜鵑なをとゝ
杜鵑なをとゝ
杜鵑なをとゝ

今宵十三夜をわ名月をとゝ月のをとゝ
なをとゝ
月の林をとゝ
をとゝ
月をとゝ
月新をとゝ

月新しき所なれども何となく哀
れ深く思ひ出られ侍
矢作の里に泊
三条相國公羽林の宿りまうでゝ花の
御盃賜はるとて歌をさぐりて奇遇の
名所の月を
あづま路へくだりなんとすれば東路へ
いでゝ月もあはれなん
名所関月
逢坂の関の月を見るにつけ新蟬も
月やあらぬ春は昔の人にあらぬ等
名所稲月
逢坂の関の月をのこりなく稲
なるくまもこゝにぞ月
寄月旅雲
幾秋の月の光を代にかけ
なほ雲の行きかへるらん
風にしぬを吹ちらす
ちとせのなかれ
いて入まくさ名ぞうれしけれ
宇治川の里とゝ所
離れもしぬ都の方をかへりみて
ちとせ経ぬうちの人の里
山中の宿にて
山中の宿はそれにしるのなかれさ
も限れば
稼ぎをつとめるもの
たゝかひ
山中の
奥はきまる関口とは
岩屋庭くおさめしる世の翼は
さもとゝしるべく守とし
今八幡とゝ
元ちる歌

今八幡とかの居の迎えて
元なる歟しるべいまわけ
とまくたてり紅葉盛りん

今橋の泊て

和とくふ月もとくと風と橋
明るまて寺ちて体ら

十八日大岩山とかの麓をとる分るまわ
寺の寺又ハ本堂ハ普門示現の
大ものおくまとすりの分ふ
法施をと奉しつ

きみの代かすみもしるあさ山の
られ大岩山となるまく

二村山越分て

おこゆるあるし山ハ世紅葉
まるうとて帰さとみん

衣の里このあるて分ん

名るはかの衣の里ハ
ゆるまにいる袖やきわん

ふるかん遠江国湖又坂ハ
ますハ京都ときわ川ハ
繁るる

誠に歩下こえを分せいとん
あるて寺おのけうのしく
ときはるるさ海ハ
川ま寺わ川ハ
ちる小船いと
壹ハ
分ハ

清水二首

とおけわ
こ分ハ
寺ち帰武年
かと坂

しかと坂とくるかとて
恭なる山和泉なる人なり伴なり
言の葉もけなるなん恒久坂
さしもせこゆる不尽の山なれど
六月に雪代遠くれ降ぬ
なほなりなるの手の内なる事
二子塚とかかしかとて
らまとなるう行まる事
先なるく富士を初る道の名を
なるこやまなは伴なくいなる
是に付いくみとかかし
契あまこやなるかはくての二子塚
さくわかるとあれ又和ある
稲中なる泊なるくなかるを演若の名を
こなるかるとなるとなるて
言まる風演の稲中霧まるく
和なる遠 林若川波
十六日稲中を出くる馬の宿なる成無
しるまの六巻川国なる且なるかかる
なる遠江なるかるかるなる祖師谷
かかるなるの言と志
あるくなる分なるなる出る言の
神をいくまの師匠なるなる霧
鶯坂山なる
うちはなるやなるけん日なる
さるはの山屋やなく朝なる
十七日遠江なるなるなる両なく伴かる
かけ川とかるる
千なる法演なるなるかるの
いくなるまなる坂の中なる両
なる坂中山なるおなるかる法師
名なるおなるかるなる富士なる
秋なるなるなる中山

さやの中山にておもひつゝけ侍る　御詠
名にしおへはいとゝ越くるに富士もみえて
秋霧ふかきさよの中山
おなしくよみ侍る　御和
旅の空はれゆくかたに夜の峯を
見しのはかりそ越てこえて秋
同しく
名もしるしみちゆく人もよその中の月
こゝやみちと　佐夜の中山
廿日藤枝の泊をたちて宇津の山越給
道は露ふかかりけり
宇津の山は露も露にほひやらく
光のうすかりけるかたにも道
ゆきくてふ駿河の府中にいたりぬ
千里始足下高山起微塵吾
しられ侍る此国の主もと川上縁終北
猿ぬいておもしろからぬわかにも心の
ちよ世雪みつらんそるとおもふ
御ふりやと念しまわけるは山の高は山
みち雪みわたれ侍りて目ある川辺の家
文事にも稽親すは君ちかなわと思の
りまし　けるとえやくおやしくそうく
おはえ給の山まる山をかきわくる引
まさり　しるとそれわうへものやきつえしそる
意望ありへいあくられ
白雲ちゝきなかのやまなも常りとまて
海のひねつての空そさやけさ
まのたのそうさ恵みたとへくて
なとあるきみるかしの紫山
これそあまるけるはれ御詠同
みれはいつく思ひしるへき　嵐の業し
たよくねならとかなくきし給
此御和
空の象をけふさかさのくやのよきの

しらが

宮内卿とはふきかさねるものを
ゆきとみるきみの千代ぞつもれる

終夜月かの山を見せてく

月雪はいとるあんなの光をへ
ゆきもそてるる姿のるる

たにはるゆき清和とをくへきの詠あり秋と
まるはのいろもかくるる夢

おしの振の月と雪とのうはけわ
あるすそつるこの歌

翌朝はの詠

朝倉のゆきのしたはるる秋をせ
さそしはてけなるるるる
あさり秋すわるのこる振るる
雪とそるるるまるる

又の和

雲掛るはるわる吹やそ
なのあさけの秋ふ世
なるわるるきるする朝見新
ふるうはるるわるるる

朝をなる秋るそのるるほるとをるる秋
おるるるるの雲一しるるるくるる
屏風はるやうるみるるを綿るる
なるくく

春るるとして朝ふるるの富士るるの
るるほるるるる秋るる

清和

るるれるかるるるとるるの雲の
ちるをるる綿帽るる那

亦は詠

伊川はるるるるや川るる川の
なるるるる今朝の帳い
うれくし秋るるるる富士のを
るるるる本ノを

たるる清和

仁安元年和
尚しなのゝ国なる善光寺のかゝやくも
かくやとおぼゆるまでなん
悔しかれやゝ月日こゝろ山川をへだ
てゝのぼるくい堀りける事
吉野の山おもしきこゝろけうとのこと已
年とかくよ出現のうち守護しかゝる
と年の支千相應寺おはしまさ
かゝる神にくくしく
なりしかくのとおぼゆ
數鳥の音しるしとあるのよ
なりとまとまるきしの繁うるき
終日ゆゝしくなりもてゆく
美山の月なるまてゆるもの
なれこそ殘れ月のうれ
唯とのなりけるつまつるへきこと
白雲のたゝなはるかゝ
月のあのこまろ山のもの
廿日清見寺うそなりをうれ
冥のさいかゝ
こゝろとまろ
山船こゝろ海のかいさとろ
をとゝ
あれ月の
山こゝや皮草薙神劍靈瑞
あるなんとこゝ
世所草薙神社九百八千社
所社
神くの山進發の山陳の
やしろあまるおうまうすこ海邊
えこと清見寺こそ

ゑんゝと清見寺にてなかめてける 三首

きよみかたそれならもいはゝ雨ふらは
こゝろの松もいくよかはらぬ色そみえけり

袖師の浦はおなしなにこそさきて給(は)らし
浦にも同名付たりとて

雲雨のおもひは袖のうら人に
いはゝやまひとをみるやうらもなし

此身にうつし侍しにほと

去きいてことはのおもひつゝの松の葉に
都の人にふみてはさまん

廿一日の朝駿河の府にて御領
旅人のをちこちめくる雲ふかし
かゝるねもしの名残惜しきを

此外御領にかきまよ覚えとゆるされ侍る
とかくまよく中にも一首代給はりにおかせまほし
るを同前後にもさきに入給し

あらさくやけのさすみねの
やとし月のなるかなきをまちし

手越河原にて

旅人のゆくへもしらぬを知る駒を
あすはけやくいそく朝たち

宇津の山にて感夢に思ひ出つゝ
うつゝの山うつゝにもゆめにも
みえしわ夢なりにけりあつま路

範政

それにはなる夢路のあとまてと
こゝろやなくて大神やみそらん
心あり給し付同詠進

神もしる宇津の日和あさまし
てすゝみても すむかたなき世を

蒲原の泊にて

夜もすからみかへし秋もくや
こゝろ藤えたの里

暮かゝは都にみかへし秋もくや
うつ蔦いろ／＼蘇えるの里
廿二日瀬戸山とか所すく
裏かへしおもへは山のほとしに蔦の葉や
しけ緑はとれさをよの山風
いかつゝとかあはれにて
古歯とあら草のそのこ夜も深く
とゝまりつるもこのあはれにして
さ夜乃中山そてぬれのにほのかみえ侍
まかふよみせてきこえしきよ御詠
布乃ねのおかりの光中ちくと
雪もわしも雲をよ乃中山
詠との歌
形みしるに植のけうすし不忘ぬねの
中まてのあしやの佐夜の中山
遠江浜ちくかわくいまのうとり入海
るゝ湖水なわ
磯りも入海ちつく毎してきわ
これ乃夕を乱ぬらと葦酒すゝ
二十三日池田ぬ宿を泊して
無下なる池さの宿乃あいまゝくり
もうえてきさ御世みをやうれき
う又秋の家とうやまて
千代あくきまいとへ君にゆつる世を
そよつかもし風うへ乃天原
せうりくの松してことに海つゝ末乃恋るさ
しかとつれ無を悦母みちやもとひて
雛の母せまのうつくさとまか乾松のよ
そよあつるゝ君の年経
浦くる何るもいかを細はいくなんと
おほえてく
伴侍のるりいあをにけさはぬあまく衣
うしろを見すてほるゝうかまぬし

廿四日雨降ゆへ湖辺坂こえて
八川方へくだりて和原一しほ見て
松ばらを一もとしたる道をたどりて
もののふくるころ
夫はるばるつるが岳に入ゆへ
あるじ家のものもわれもいとなれ
ばやうやうのことをすませり
廿五日桑河と尾張の境川をとりて
ふたまたにて美濃のさうれ川
あるいのほとりまでの
海道
伊勢ものがたりのうちにはつせ
ちかくなるの神まうでまて
ちかくなりて雲はる家のとなく
鳴とかるゆへ
たうあやとはいとかこと
あるまとりとりて
那とて神をはらへしくあるとも
つるさはらはかあるかをかしう
はつせの海道
菅はるとて
しやおつるつまを
山道をつるまを法華寺の
かく張かくかえ
山ちかう
恵
ゆかしきあるとをしらに
廿六日
跡をたどりくるくるあ
ゆかしき

[illegible]

すがまた

川舟のさしもやしのけをみちうまて
をつくしのまさ姫の門はうみ

二十七日の夕方の川とゝ所まて潮の落る
[illegible]

[illegible]

常のけをとゝ所まて羈旅の門の
秋の果て小春潮ならぬさぬかの光保
[illegible]

[illegible]

醒井の[illegible]をしらして一切知ら清水
二[illegible]別しを覚し給し

くみ[illegible]ふるさ世[illegible]
[illegible]

百姓の[illegible]
[illegible]

[illegible]

武佐の[illegible]

佛前二首

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二月廿九日の夜の詩歌を和し給へる

名ゆたかなる梅の花
やうくさかりなる代のかをり

おもふこと成りぬ

誰も今をときはるとあるさみち
せりつむこと忘れぬ山し賢し

詩歌月雪花の事

今きたる東路にわたる雁さそ
かへるる都なりしよりも春

光孝

十月十二日今度詩道中詠進之和歌
勅一卷可進覧曲被仰下仍馳筆
翌日令持参者也